Osaka University Knowledge Archive

Title	现代汉语语气副词主观性研究
Author(s)	章, 天明
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/540
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【14】

氏　　名	章（ショウ）　天（テン）　明（メイ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４７９２　号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	現代汉语语气副词主观性研究 （現代中国語語気副詞主観性研究）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　杉村　博文 （副査） 教　授　古川　　裕　　世界言語研究センター特任准教授　劉　　蘭民 世界言語研究センター特任准教授　金　　昌吉 愛知大学国際コミュニケーション学部教授　荒川　清秀

論　文　内　容　の　要　旨

本研究は主として意味機能理論に基づき、同時に認知言語学と文法化理論の研究方法を参考にして、意味、機能、認知、文法化の角度から現代中国語の語気副詞の意味的特徴と語用論的機能を考察し、その主観性について記述分析した。

本論文は９章から構成されている。第１章では、語気副詞を中心に中国語の副詞の研究史を概観した後、現代中国語の語気副詞に関する研究で得られた成果をまとめ、同時に存在している問題点を指摘した。また、本研究で用いる理論と研究方法、および言語資料について述べた。主な内容は以下の４点である。

①中国語研究史における「語気」の地位とその重要性を述べる。

②現代中国語語気副詞の使用状況と研究の必要性を論じる。

③現代中国語の語気副詞の研究を概観し、主に構文、機能、意味特徴の記述、語用論的な機能及び主観性など四つの視点から語気副詞に関する先行研究を紹介する。

④従来の研究の問題点や不足点を指摘し、本論文の研究の重点と目的を示す。

第２章では、国内外における「語気」に関する研究を概観した後、「語気」の本質的な定義を通じて、中国語の特徴と現実を考察し、語気副詞の性質と範囲を規定した。現代中国語の「語気」は、話し手が文の命題に対する主観的な認識と態度を表わす文法範疇と文法形式であり、現代中国語の語気副詞は話し手の主観的な態度、感情などの語気を表す副詞である。語気副詞の下位分類に関しては、先行研究における意味分類の欠点を補うため、本研究は新しい分類基準を提示した。第２章の主な内容は以下の３点である。

①国内外の「語気」に対する認識と先行研究。

②語気副詞の性質。

③語気副詞の範囲と分類、および語気副詞の範囲を規定する形式的基準と下位分類基準。

第３章では、語気副詞の予期機能に基づき語気副詞に対して下位分類を施した結果、事前予期と最終結果の関係によって、語気副詞を次の三種に分類した。

①正予期推定類語気副詞

②中性予期推定類語気副詞

③反予期推定類語気副詞。

また、予期表現が実現する効果と予期量の変化から見ると、「予期増量」、「予期恒量」、「予期減量」の三つのタイプに分けることができる。予期表達は文脈を活性化し、情報を補足することができる。また、予期推定はタイプによって、伝える情報量が異なってくる。このような情報量の違いと強弱は語気副詞の主観性と密接な関係がある。第３章の主な内容は以下の４点である。

①語気副詞の予期期表達特徴

②語気副詞のよる予期推定のタイプとその意味的特徴

③語気副詞の予期表達のタイプと予期量

④語気副詞の予期表達の語用論的機能分析

第４章では、主に語気副詞の分布と意味論的、語用論的機能を論じた。語気副詞はほかの副詞と異なる性質をもっており、その意味論上と語用論上の特異性は文法形式に反映される。すなわち、語気副詞の文中における位置は比較的に自由で、述語動詞の前に置かれることも、また文頭、文末に現れることもある。また、口頭表現においては、単独で用いることもできる。このような文法形式に見られる語気副詞の特異性は、その意味論的、語用論的な伝達の主観性に由来するものと考えられる。しかし、語気副詞の位置の自由性は音節、意味、語用論的な制限を受ける。文中の位置が異なると、語気副詞の意味、語用論的な伝達機能も異なる。第４章の主な内容は次の３点である。

①語気副詞の文法上の分布特徴。

②語気副詞の文法分布のタイプ。

③語気副詞の位置分布を影響する音声、意味、語用論的な制約の要素。

④語気副詞の位置と意味、語用論的な機能の関係。

第５章では、“终于”と“总算”という語気副詞の具体例を挙げて分析比較し、語気副詞の主観性と語用論的な機能を検討した。“终于”と“总算”は語用論的な機能における違いが見られた。“终于”に関しては、時間を表わす“终于$_1$”と語気を表わす“终于$_2$”が存在していることを明らかにした。時間副詞である“终于$_1$”は客観的な叙述に用いられ、主観的な評価をもたない。これに

対して、語気副詞である“终于$_2$”の基本的な語用論的機能は主観評価である。“总算”は語気副詞的な用法しかもたず、語用論的な機能は主観的な評価である。“终于$_2$”と“总算”はほかの副詞と共起する場合や予期実現などの振舞いに違いが見られ、“总算”は“终于$_2$”よりさらに主観性が高いことが分かった。第５章では主に次の３点について分析した。

①時間副詞“终于1”と語気副詞 “终于2”の意味構造と語用論的機能の比較。

②“终于2”と“总算”の意味構造と語用論的機能の比較。

③予期値実現度と主観性の強弱の関係に関する分析。

第６章では意味フレームの構築と主観量スケールの概念を通じて、同様な意味特徴をもつ語気副詞の主観性に関わる特徴を分析し、比較した。語気副詞の主観性の強弱は、主観量の序列に現れる。「或然類」の語気副詞“也许”と「必然類」の語気副詞“一定”は同じ推量を表すタイプでありながら、文法的振る舞いには違いが見られるが、このことは主観量のスケールが語用論的な予期値で表現され実現されるものであることを物語る。語気副詞に現れる主観性の強弱は語用論的な予期値と（期待値）の満足度の程度と関わっている。第６章の主たる内容は次の５点が挙げられる。

①語気副詞と主観性、主観量。

②「或然」と「必然」に共通する意味基盤

③“也许”と“一定”の意味構造の分析

④“也许”と“一定”の主観量スケールと期待値

⑤語用論的な予期値及びその満足度と主観性との関係

第７章では、“其实”の意味及び“其实”を含むクローズの意味構造モデルの記述を通じて、“其实”がもつ反予期機能、語用否定機能、情報量増量機能、文脈関連等の語用論的機能の相互的な関連性を分析し、語気副詞“其实”が予期値の語用論的な否定を通じて関係する文脈を活性化し、伝達情報量を増やすことによって、強い主観性を表したことを明らかにした。第７章の主たる内容は次の３点である。

①“其实”意味構造モデル

②意味関連と構造関連

③“其实”の反予期、語用否定、情報量増量、文脈関連等の語用論的機能の分析

第８章では、“Ｘ然”類語気副詞の中の「確然」について分析し、“Ｘ然”類語気副詞の文法化過程と主観化表現の関係を論じた。「確然」の分析を通じて、“Ｘ然”類の語気副詞の意味機能、文法機能と語用論的機能は“Ｘ然”内部の“Ｘ”と“然”の意味および語用論と関係があるばかりでなく、“Ｘ然”が現れる文中の位置、文法的な機能などの外部の諸要素とも密接な関係があることを明らかにした。これらの要素は“Ｘ”と“然”を組み合わせると同時に、“Ｘ然”の変化と発展のプロセスにも影響し続ける可能性がある。第８章の主な内容は次の２点である。

①“然”の基本義、拡張義、借用義、虚化義の分析

②内部構造の変化、文法機能の変化と意味の変遷の三つの視点から“确然”の文法化過程を分析した。

第９章は結論である。語気副詞研究において本稿が勝ち得た成果と今後に残された課題を示した。

キーワード：語気副詞　主観性　予期表達と予期量　語用論的予期値　語用論的否定

論文審査の結果の要旨

本論文の中核部は、中国語学で「語気副詞」と呼ばれる語群の意味と文法機能をよりよく記述するための方法論と、その方法論に基づいて展開されたケーススタディ４件から構成されており、ケーススタディ４件のうち３件までが、すでにレフェリー付き学術誌（日本中国語学会『中国語学』を含む）に採用されていることは、本論文の提案する方法論が一定の有効性をもつことを物語っている。

本論文は「語気副詞」と呼ばれるものの多くが、話者のもつ「予期値」と現実に観察された事象・事件との相似相異、さらに相似相異の程度の強弱と深く関係していることに着目して、「正予期」「反予期」「中性予期」や相似相異の「増量」「減量」「恒量」等の基準を用いて、独自の「語気副詞」分類法と分析記述方法を提案している。なお、ここで言う「予期値」とは話者のもつ「社会常識」「期待値」「文脈における先読み値」等を含む概念である。

また、「語気副詞」が有する主観性の強弱は相似・相異の「増量」「減量」「恒量」に対応することを指摘し、さらに「語気副詞」がしばしばもつ節と節の接続機能に関しては、それが「予期値」に基づく言外の意味の読みこみや、「予期値」と実際の相似・相異から推論される論理の展開に起因することも指摘している。

「語気副詞」は品詞分類の「掃き溜め」と言われるほど、そこに分類される語彙の意味範囲が多様であるあるため、本論文の提案する方法論がはたしてどの範囲まで有効であるかはなお今後の検討を待たねばならないが、すでに得られた成果からして、「語気副詞」の一定の範囲の分析記述において、従来の方法を超える長所を有することは明らかである。

上記評価に基づき、本審査委員会は、本論文が博士号（言語文化学）を授与するに相応しい業績であると判定した。